

## 50 神戸海援隊レリーフ

中央区波止場町2(メリケンパーク)



### ▶ 流 政之(ながれ まさゆき)

“Samurai Artist”の異名をもつ世界的に活躍する彫刻家です。

大正12年(1923)長崎県に生まれ、立命館大学へ進学。海軍予備学生出身の零戦パイロットとして終戦を迎えます。

その後、世界各地を放浪、独学で彫刻を学び現在に至ります。昭和50年(1975)には、ニューヨーク世界貿易センターのシンボルとして約250トンの巨大彫刻「雲の砦」をつくり国際的評価を得ます。

また、作品「受」はニューヨーク近代美術館の永久保存作品(パーマネントコレクション)として収蔵されており、彼の国際的評価の高さを裏付けています。

最近の作品に、関西学院大学理学部(現理工学部)の兵庫県三田市への移転を記念して制作された「月わり」(2001年、黒御影石)、立命館慶祥中学校・同高等学校に寄贈された「NANDABE」(2004年)などがあります。

## 51 外国人居留地時代の標柱

中央区浪花町15

▶ 外国人居留地15番地と16番地の境界を表す石柱です。



## 52 神戸外国人居留地15番館

中央区浪花町15

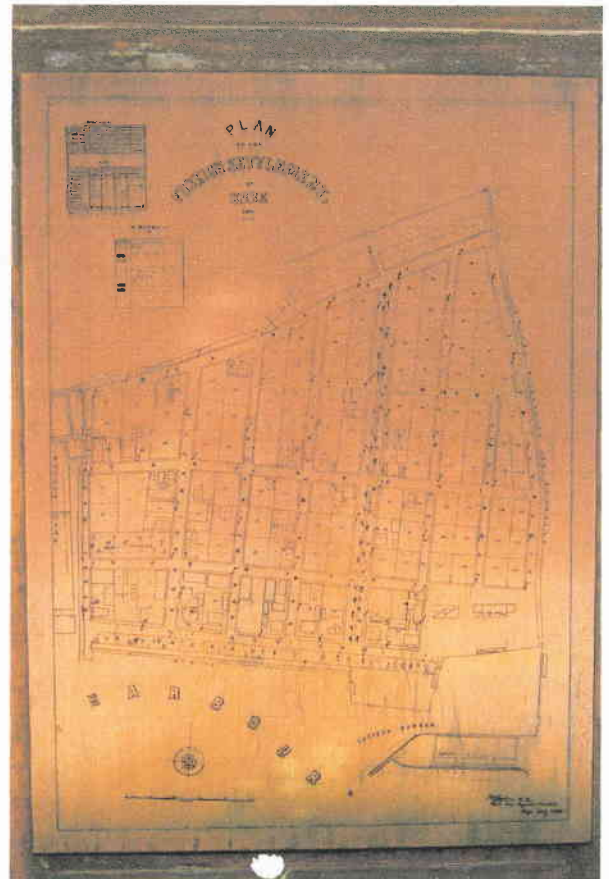
- ▶ 明治13年(1880)に建てられた異人館は、神戸市内に残された最古のものです。阪神大震災で全壊したものの、復旧工事により震災前の姿に戻ることができました。



## 53 神戸外国人居留地跡

中央区西町36

- ▶ 安政年間に結ばれた5カ国との条約で、条約を結んだ国の人々の住む居住と貿易を認めた区域のことを「外国人居留地」といいます。神戸における居留地は、開港された慶応3年12月7日(1868年1月1日)から明治32年(1899)まで外国人による自治が行われていました。居留地の基本的な設計は、イギリスのJ・W・ハートが作成し、126区画に分けられました。現在でいうと北東角:花時計の西側にあるガソリンスタンド、南東角:神戸地方合同庁舎、北西角:大丸百貨店神戸店、南西角:メリケン波止場交差点にあるJA農業会館となる範囲でした。このうちイギリス人が約半数を占めていたそうです。



- ▶ 三宮神社は西国街道に面しており、かつては境内から湧き出る清水が、神戸に出入りする船の飲料水に使われていたそうです。  
神戸事件については29、30で詳細を紹介しました。  
イギリス外交書記官のアーネスト・サトウの日記には、次のような記録を残しています。  
「二月四日(陰暦一月十一日) 早朝から備前藩兵が神戸を通過してゆくのを見たが、午後二時頃、ある家老の行列が一名のアメリカ水兵を射撃した。その水兵は、行列のすぐ前方を横切ろうとしたのである。この発砲につづいて、かれらは出でた外国人をひとりのこらず殺害しようとしたが、幸いにも大事にいたらなかった。  
彼らは居留地の奥の端を通る道をすすんでいたが、いっせいに射撃を開始したのである。かれらが使っていたのは元込め銃だっと思う。外国人が、平地をころげるように逃げてゆくのが見えた。アメリカ海兵隊員は、ただちに追撃を開始した。  
イギリスの護衛兵も集合を命じられ、若干のフランス水兵も上陸した。(途中省略)  
われわれの最初の一斉射撃で敵は方向を転じ、島に駆け込み、堤の下からわれわれ目掛けて撃ってきた。これにもう一度反撃を加えると、敵はいっせいに逃げ出した。これを追撃し、時折逃げそこなった敵を見つけると発砲しながら進んだが、かれらは丘陵地帯に逃げ込み、ついにその姿を完全に失ってしまった。(以下省略)」



#### <地中から出た大砲>

大正13年(1924)市電の敷設工事中に大砲が3門発見され掘り出されました。  
その後、大砲についていくつかの説が出ました。  
①和田岬砲台にすえつけられた大砲  
②福岡藩が船で積んできた大砲 などなど  
神戸事件勃発直後に、福岡藩の蒸気船蒼隼丸が兵庫港に碇泊していました。  
外国人は港に碇泊していた福岡藩、筑後藩、宇和島藩、平戸藩、越前藩の船を抑え、武器を没収し、その時に大砲も入っていたのではないかとされています。  
結局、確認されないままこの3門は新川橋詰に柵を設けて並べられました。戦時中、金属回収の供出がこの3門も適用される事となりましたが、神田兵右衛門がそのうちの1門を引き取り、邸内に保管していました。その後、戦災等で保管が難しくなり国際港湾博物館に納められ保管される事となりました。(国際港湾博物館はその後閉館しました)  
さて、三宮神社にあるこの大砲も、ある古鉄屋の前に捨て転がされてあったのを、「神戸事件発生地」である三宮神社に寄贈されました。



情報提供:白濱忠信氏

## 55 神戸海軍塾(勝塾)書生寮跡

中央区三宮町1-4-12

- ▶ 勝海舟による徳川家茂への建議で神戸海軍操練所が設立されましたが、同時期に勝海舟は、塾の経営についても正式に幕府から許可を得ています。勝海舟日記には次のような通達が書き写されています。

文久三年4月二十七日

勝麟太郎

撰州神戸村、海軍所、御取建相成り、土着の者、追々御引移り相成るべく候。

就いては、海軍所御入用、并びに稽古入用として、年々金三千両宛相渡すべく候間、御取締りは勿論、御実備相成り候よう取扱い、年々御勘定仕上げいたし差出さるべく候。尤も津田近江守、松平勘太郎へ掛り仰せつけられ候間、談ぜらるべく候事。

其方、拝領高のうち五十俵、撰州神戸村最寄りにおいて、地方に御引替え下され候間、委細は御勘定奉行に談ぜらるべく候。

撰州神戸村最寄りへ相対を以て、地所借受け、家作いたし、海軍教授致し候義、勝手次第致さるべく候事。」

「神戸古今の姿」という書によると神戸海軍塾の書生寮がこのあたりにあったそうです。勝海舟の更迭により塾生たちは四散を余儀なくされます。



勝海舟

## 56 勝海舟邸跡(神戸海軍塾跡)

中央区三宮町1(阪急三宮駅周辺)

- ▶ 「撰州神戸村最寄りへ相対を以て、地所借受け、家作いたし、海軍教授致し候義、勝手次第致さるべく候事。」

勝海舟は、海軍操練所と平行して海軍塾の開塾とその場所として屋敷の築造を願い出ていましたが、その許可が下りませんでした。

海軍操練所の運営・建設費は、幕府から年三千両が出され、元治元年(1864)9月、2ヶ年分として六千両を受け取っています。

しかし、塾の建設・運営費用は不足しており、越前福井藩に助力を得るため、坂本龍馬を福井藩へ遣わしています。海舟は日記に、この屋敷にかかる費用を詳細に記載しています。

それらの費用を合計すると405両でした。

海軍操練所の開所公布は元治元年(1864)5月28日ですがそれまで海軍塾の塾頭を務めていた佐藤与之助が、神戸海軍操練所の教授役となります。

佐藤の後を坂本龍馬が抜擢され、海軍塾の塾頭を務めました。

しかし、この5月28日以降、6月5日の池田屋の変、7月の蛤御門の変が相次いで起こり、11月10日、勝海舟の罷免に伴い、海軍塾は解散となってしまいます。



北東角にあたる勝海舟邸(勝塾)跡